

2015年12月10日に西宮市立大谷記念美術館で行われた授業に対する榊形による授業の紹介とコメント

指導案より

西宮市立甲陽園小学校 5年図画工作

指導者 5年生担任 桐畑詩織・図工 大畠麻子

(授業は別の教師によってもう一回行われたが、ここでは、切畑・大畠先生の授業を中心に報告)

単元名 鑑賞「美術館で哲学しよう！」

宮市立の小学校の5年生が西宮市大谷記念美術館で松谷武判作の「波動」を鑑賞し、その後、作品を前にして自分の感じたことや疑問を発表し合うという授業記録を考察。

授業の流れ(全体で約25分、児童は30名ほど)。

子どもたちは作品を、そのまま正面から立って見たり、横から見たり、寝そべって見たりと、3分間ほど自由に見た後、輪になって座り、コミュニティーボールを使って、議論するという形を取る。学習のねらいは「作者や作品の知識にとらわれることなく実際の作品と積極的にふれあうことによって、感性を働かせながら多様な発見をすること」。

子どもたちの発言の流れは、最初は、作品のタイトルが「波動」ということであったので、ダイレクトに波の動きと発言する子、「雲」みたいな感じ、「上から雨が降っている」、「砂浜に打ち寄せる海の波」、などの意見が出される。さらに、「躍動感」があるという発言が続く。先生はこれらの発言を受けて、子どもたちの印象がタイトルに引っぱられ、議論の展開がないと判断し、波動という言葉でイメージするのは違った見方をした子はいない、と問いを出す。先生のこのファシリテートの仕方は、非常に適切であったと思う。

この先生の問いかけに対して、

「蛇が動いているような感じ」というように、絵の印象を具体的なものに例えて述べる子がまだいたが、子どもたちの発言は、その「波」の様子を、「波じゃなくて、涙が出ている様子で、水が溜まっているのは涙の流れを一瞬のところにとらえている」、「大きな波が、どンドンやってきて、地面が、何か奪っているような感じ」、そしてこの発言を受けたせいか、「津波がきて、絵の上の方は津波のためにごちゃごちゃになり、盛り上がっている線は、瓦礫のように見えて、下はまだ上よりもきれいだから、津波に押されてはいないみたい」というような、具体的な描写を伴う発言があった。

児童の一人は、最初、「波なんだけど、あの芸術作品は、波の瞬間とか、波が終わったみたいな様子を表しているとか、水たまりにも思えた」と発言していたが、友だちの意見を聞いて、「波じゃなくて、涙が出てきているような感じで、そこの一瞬をとらえているのが、水たまりのように見える」というように、自分の意見を更に具体的に展開するようになった。

この子の発言を受けて、別の子が「瞳から涙がでているとか」と発言すると、最初「雲」と言った子が、「悲しみがあふれ出してるような感じ、心の動きとかによって何か、変わってきたり、これは悲しいかなって思いました」という発言をして、ある意味、その後の議論の流れを作っていた（この子は後で、「悲しみを掬っているのかなって思いました」という発言をした）。例えば、「涙が波みたいにひろがっているのかなー」、「私も、ずっと、他の人の意見を聞いてて、全く何か違う考えが浮かんできて、最初、Aさんは水たまりみたいと言ったのを聞いて、その水たまりに雨が落ちてきてその後に、涙が広がってきたみたいに思えました」、「涙とか水をスプーンで受け止めているような感じが、他の人の意見を聞いていて、しました」「描いた人はやはり悲しい気持ちを涙で表したと思う」「描いた人はその時悲しい思いで描いたのかな」という発言が続いき、作者の意図に目を向けた。

さらに、一人の子は、「最初絵の様子を、下はハッキリして上は形がハッキリしていないと言っただけで、それはなぜかなーと考えていて、瞳という言葉聞いて、その理由が分ったような気がする」という思考の流れを説明したり、他の疑問を述べるということをした。この子は P4C が何か問いを立ててそれを考えるという活動であると理解して、このような発言をしていたようである。そして、この子は、友だちの「瞳とか水たまりとか、いろんなものが想像できる感じ」という発言を受けて、「いろいろあるんですけど、じゃー、えっと、その一、名前、波動という言葉の意味とか、そういうのって何だろうって考えたら、何かいろいろ発信するようなことも、そういうのが繋がってくるもとも、いろいろあると思います」という発言をした。

先生は、この子の発言を受けて、「今ちょっと、波動という言葉に、誰かが注目したんだけど、確かに、水だとか涙とか、そういった時も波という言葉とかを連想するよね、今、世間の動きとか言った子もいたし、波動っていろんな言葉への広がりがあると思うんだけど、何か、波動という言葉で、思いつく言葉、ことってある？」という形で受け止め、議論をさらに展開しようとした。これも、素晴らしいファシリテートだと思う。また、単に「波動という言葉の意味は何だろう」という問いの形を取らないで、「波動という言葉で思いつく言葉やことはあるかな」という形で問いを出しているのも、子どもたちの発言をしやすくしたと感ぜられる。

先生のこの問いを受けて、子どもたちは、「悲しみという感情の動き」、「平和の中に何か衝撃を与えてそれが伝わるというイメージ」、「ここの展示室にある絵が、すべてが悲しみを伝えているという感じ」、「何か広がっていくというイメージ」、

また「感情が伝わるということであっても、悲しみではなく、涙を掬ってあげる優しさが伝わってくる」という発言をする子（雲と言った子）がいると、「皆とは違って、波動には力強い感じがする」という発言をして、初めて自分の意見を、それも、他の人とは違う意見を主張したのが印象的であるし、その後、優しさのイメージに対しては、一人の子が「黒というは闇というか、気分的にはやさしい感じの絵もあるとは思いますが、やはり悲しみの方が多いかないか」と発言し、もう一人の子が「やはり真っ黒なものを見ていけば、

どんどん引き込まれていく感じで、心がどんどん悲しくなる」と反対意見を述べる場面が見られるようになった。

以上が子どもたちの発言の流れであるが、先生は最後に、「今沢山の意見が出ましたね。同じ意見の子もいたり、ちょっと違ってという子もいたけど、こんな形で話をして、何か今日振返って発見があった子、思ったことがある子はいますか。絵のことだけでなくもいいですよ」と子どもたちに反省あるいは自己評価を促した。

一人の子は、「自分だけの印象を与えるだけじゃなくて、他の人の意見を聞いて、自分の意見が変わることもあるし、納得することもあるし、そうやって意見をぶつけることは改めてすごい大切なことなんだなーと思いました」と一般的な意見を述べたのに対し、二人の子が、教室ではなく美術館でこのような長い話し合いをしたことがなかった、そのような状況の中で、仲間の意見を聞いて、自分の意見を述べていき、自分の意見も変わっていくというのはいいなー、という発言をした。子どもたちは、教室での授業と美術館での授業の違いを肌で感じていたようである。

参加者からの意見

担任の先生に是非とも参加してもらいたかった。

普段の授業とは違う子どもたちの姿・発言に対して参加者たちがどのようなコメントをつけるか、それを知って欲しかったのと、それを受け止めた上での議論をしたかった。

それぞれの子どもの発言から、その子が普段教室でどのような様子であるかが、想像でき、それが、担任の先生が普段思っていることと同じか、それとも違うのか、ということが議論できる。

美術館で座って実施する場合は、毛糸玉のコミュニティーボールよりも、例えば、新体操で使うボールのようなものの方がやり易いのではないかな。

自分も大谷記念美術館で授業をやってみたい。

実際の授業記録は

<http://p4c-japan.com/wp/wp-content/uploads/2016/03/dialogue-in-museum1.pdf>